

---

# 三日坊主

のあ@更新停止中

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三日坊主

### 【Nコード】

N7961M

### 【作者名】

のあ@更新停止中

### 【あらすじ】

主人公・三宅拓哉の家族、姉の美咲と妹の蘭南は極度の飽き性。そのためやることは長く続かず、どうしても三日坊主になってしまう。

そんな妹がある日突然言い出した「5kg痩せる!!!」宣言。  
妹は5kg痩せる事ができるのか!!!!

## ダイエット宣言(前書き)

ぐだぐだになると思いますが、どうぞ温かい目で見てやってください  
い m ( ) m

## ダイエット宣言

「私、5kg痩せる!!!!!!」

「……は？」

俺、三宅拓哉みやけたくやはこのしん、とした空気に聞き返す。

「だから、私は一週間で5kg痩せるの!!!!!!」

「…ふうん…？頑張れ」

「お兄ちゃん冷たい!!!!!!」

妹である蘭南らんなんは頬を膨らませて俺を見る。

俺は、適当にあしらうと二階の自分の部屋へ戻る。

俺は部屋へ戻るとベッドに転がり、蘭南の発表したダイエット宣言について考える。

…ダイエットねえ…、あの何やっても長続きしない三日坊主のあいづが？

この前だつて『将棋の達人になる!!!!!!』とか言つて二日目に俺が相手してやるつて言つたら『え〜、もう将棋やめたあ』とか言つてたくせに？

それに俺の家族はほとんど（俺を除き）三日坊主なんだよな…。  
ちなみに家族構成は父、母、姉の美咲みさき、俺、妹の蘭南にハムスターのチビ。

まあ、気になる事あつただろうけど気にするな。

絶対、ダイエットなんか続かないよ…。

俺はベッドにうつ伏せになると大きなため息をついた。

一話目 + 開始!!!

「ねえ、お兄ちゃん!!!」

ドンドンドン!!!

ドンドンドン!!!

…だ、誰か助けてくれーっ!!!

只今、妹のダイエットに巻き込まれ中。

ドアの鍵は閉めているため開くことはないとしても衝撃が激しい。  
これはヤバイ。

ドアが壊れるー!!!

「いーじゃん、走るの付き合ってくれたって!!!」

「やだよ!このクソ暑い中走るなんて!!!」

「じゃあ夜にするからー」

「そういう問題じゃねんだ!!!姉貴誘えばいいだろーが!何で俺  
なんだよ!!!」

「お姉ちゃんがお兄ちゃん誘うといいよ、って言ったの!!!」

ドンドンドンンドン!!!

まずい…これ以上やったらホントにドアが危ない…!!!

「分かった!分かったから、叩くのやめろ!!!」

「ホント!?じゃあ早く行こうよ」

「準備するから下で待って」

「はい」

……。

いったか？

俺は大きいため息を吐いた。  
何回も。

俺はジャージに着替えるため息を吐きながら階段を降りる。  
すると、蘭南は靴をはいて待っていた。

…ほんと、行く気まんまんだな。

「早く！ー！！」

「分かってるよ……」

俺は運動靴を出し、はいた。

その間に蘭南は玄関を開け、準備体操をしている。

俺が外に出ると、蘭南は何も言わず走り出した。

「え！？」

「ほら、行くのー！！」

「…はい」

何、この関係…。

俺は一言いうと、蘭南のペースに合わせて走った。

だいたい20分くらい走ったところで蘭南を見ると、結構辛そうだった。

「…大丈夫かあ？」

「…ハア、うん…ハア」

「キツかったら言えよ？」

返事をするのも辛いのか、頷くだけだった。

…大丈夫かよ、ほんと。  
汗が凄いんだけど…。  
まあ、初めてだから仕方ないか…。  
俺は元・陸上部だったからか、男だから体力があるのか全然平気だった。

あれから5分後くらいに蘭南は歩き出した。  
俺はペースを変えず走っていたため、後ろをみるとかなり離れていた。

俺はそこにとまり、蘭南がくるのを待つ。

「ハア…お兄、ちゃん…よく、平気だね…ハア」

「ん？まあな。自分でもビックリしてる」

「何、ハア…それ」

「かなりキツそうじゃん。帰るか？」

「…うん」

約30分走ったのか…。

でもまあ、初日としてはよくやったかな。

家につくころには蘭南もうルンルンだった。  
そして靴をぬぐやいなや…。

「さて、体重量ろーつと」

「待て待て待て。そんな早く体重減らねーから」

「えーっ」

「えーっ、て。当たり前だろうが！！そんな簡単に痩せれるなら俺

だって毎日走るわ！！！」

蘭南はそのあともブツブツ文句を言いながら自分の部屋へ入っていった。

…大丈夫かよ、あの調子じゃ続きそうもないな！。

## 二話目 + 嫌がらせ??

我が家の家庭の食事準備は当番制になっている。  
そして今日は姉貴の日。

姉貴は料理が苦手。

この間「お菓子作りなら出来るのに」と愚痴っていたが実際作って  
もらった時は酷いものだった。  
クッキーが真っ黒になっていた。

「なあ、姉貴ー」

『……………』

いつまでたっても料理を作ろうとしない姉貴に俺は苦情を言いに行  
く。

「なあってばー」

『……………』

ドアを軽く叩きながら呼ぶ。

…が返事は返ってこない。

俺はなんとなく苛つきながら続ける。

「おい、早く飯作れよ。腹減ったんだよ!!!」

『五月蠅いな、今からつくるじゃん!』

「うわっ」

急にドアを開ける姉貴。

何だ? 機嫌悪いのか? ……って、ん?

俺の視線は姉貴の持つコンビニの袋にうつる。

「何？これ」

「晩ご飯」

「いや、今から作るって…」

「だから今から温めるの」

ちよつと待て。

それって作るって言うか？

しかも何だよ、グラタンって…。

カロリー高いのばかりじゃん…。

蘭南ダイエツトするって言ったのにグラタンで…太らせる気か？

「デザートも用意してやったんだから、有り難く思いなさいよね」

「いや用意したって…。買っただけじゃん」

「細かい事は気にするな」

「いや全然細かくねえし…。しかもデザートって何？」

「ケーキ」

……。

何、コイツ。

高カロリーのもんばっかじゃん。

いや俺はいいよ？ダイエットもしてねえしカロリーとかどうでもいいから。

でもさ、姉としてどうなの？

自分の妹がダイエット頑張るって言ったそばから高カロリーって…。嫌がらせか、オイ。

「何だよ、その嫌そうな顔は」

「だってさ、蘭南ダイエツトしてるじゃん」

「だから何だ」

「…邪魔する気？」

「誰も邪魔しようなんて思っとらんよ。さっきも走ってただろ？だからご褒美としてだな」

「いやいやいや。褒美になってねえよ。ただ太らせてやろうとしてるだけだろ！！」

「んまつ！！なんて事言うの！？」

姉貴は近所のおばさんのような手の動きと喋り方をする。

あ、これが姉貴の喋り方じゃないから。

普段はもつとちゃんとした喋り方だから。

…って何で俺がフオローしてんだ？

「…腹減ったんだってば」

「だからこれ晚ご飯。ほれ」

「へ？？」

姉貴は袋を俺に渡すと自室にこもる。

俺はその場に立ち尽くす。

……。

これを俺にどっしりと！？

一話目 + 嫌がらせ?? (後書き)

結局晩ご飯はグラタンだったそうです ( )

### 三話目 + 小学生??

はい、皆さんおはようございます。

小鳥がぴちぴち言ってますね、はい。

…とまあ、これはいいとして…。

この家に事件が発生。

「おい、チビ。運動してるのかあ？」

そう言いながらチビのお腹をツンツンする姉貴。  
そしてその横でわけのわからんポーズを取る妹。

「わけ分からんポーズじゃないもん!!!」

「…なぜ俺の考えてる事が分かった」

「顔にでてた」

「あ、そうでっか」

何かこんな会話も面倒くさい。

で、我が家に起こった事件というのは夏になってチビが急激に太ったのだ。

赤ちゃんの時から春に飼ったため、チビにとって初めての夏。

で、暑すぎて運動していかないのか見た目がずどん、と変わった。

もうチビという名前はふさわしくないほどに。

「お前、チビじゃなくデカだろー」

……。

姉貴も同じ事を考えてたらしい。

さて、この問題をどうにかしないと…。

「なあ、餌をちょっと減らしてみれば？」

「お前はチビに拷問をさせる気か！！！」

「いや、拷問で…大袈裟な」

「もし今がチビの成長期だったらどうする！！！！でかくなれないぞ！！！！」

今でも十分でかい気がする。

とまあ、それはいいとして。俺はなんとなく蘭南の方をみてる。

「……………何だよその格好は」

「いや…こうすれば…いいらしいから…」

組体操か。

思わずツツコミそうになる。

蘭南は何を血迷ったか逆立ちをしている。

どうせならV字型すればいいのに…。

俺はチビに目を戻すと、姉がチビの口に指を入れている。

そして案の定指を噛まれる姉貴。

おい、あなた頭大丈夫ですか？

口に手突っ込んだら噛まれるにきまつてるだろーが。しかも何半泣きしてんだ。

「ちょ、まじ痛え…拓哉、絆創膏」

「俺は絆創膏じゃねえし、痛いのは当たり前だろうが。馬鹿かお前は」

「お前が絆創膏じゃないのは見て分かる、小学生かお前は。何となくやってみたかったんだ」

「ちょっと言ってみたかったんだよ。何がなんとなくだ、お前は幼稚園児か」

「何がちょっとだ。小学生の低学年レベルだな。私は立派なニートだ」

「フン、どうせ俺は小学生ですよ。んな事を胸派って言う事じゃねえし、ニートに立派も糞もねえよ」

「ようやく認めたか」

「……おつ」

「そうか」

「……」

「……」

何か最後おかしかった気がする。

……がまあいい。

なんか今の会話会話になってなくねえか？

……まあいい。

って何でさっきから俺は自問自答ばかりしてんだ……！！！！

くっそお……。よし、話題を変えよう。

「おい、蘭南今日は走るのか？」

「もちろん。あ、そうだ……！！」

「……」

「チビも一緒に走ったらどうかな？」

……。

こいつもしかしてホンモノの阿呆か……！！

馬鹿かコイツは！

ハムスター外だしたら喜んで逃げるわ……！！

何なんだよ俺の家族は……！！

そろいもそろって阿呆ばっかか……！！

ちくじきし  
…。

## 四話目 + 英語 V S 蘭南 前編

コンコン???

「お兄ちゃん」

「ん？」

いつもは鍵が開いても強引にドアを叩いたりするのに軽くノックをして蘭南が入ってきた。

俺は午前中する事も無かったからベッドに転がり漫画を読んでいた。

「どうした？」

蘭南は入ってきて両手を隠すだけで何も言おうとしない。

「あのね?…英語教えてほしいの…」

「…この俺に頼む？」

「お姉ちゃんは忙しいって言ったから…」

姉貴が忙しい訳ねえだろ…。

またPCでもやってるのか…もしくは教えるのが面倒くさかったのか…だな。

俺は体を起こすとベッドからおり、床に座る。  
するとなぜか蘭南は俺の横に座る。

「…何で隣に座るんだ？」

「……………」

「正面の方が教えやすいんだが…」

「……………」

蘭南は黙ったまま首をふる。

…まあいいや。

「で？英語のなに？」

「会話を覚えなさいといけなくてね？昨日頑張ってた覚えなの」

ああ、夜中の11時くらいに聞こえてたのはそれが…。

てつきりなんかの呪文でも唱えてるのかと…。

つか、そのせいで俺あんまり寝れなかったんですけど！！！！

「おう、言ってみな？」

「えと…相手になつて私の質問に答えてくれる？」

「ああ…分かればな」

すると蘭南は思い出す仕草を始める。

俺はその間中学で習った英語を思い出していた

「Hello」

「え、そこから！？Hello」

質問がくると思ってたのに。

挨拶からだったのか…つかはるーくらい悩まず言えるだろ。  
どんだけ自信ねえんだ。

「わっちゅゆあーないむ？」

…何て言った？今。

Helloは無駄に発音よかつたくせに一気に発音悪くなったな…

しかも何だ『わっちゅ』って…。

「My name is Takuya」

「Nice to meet you」

いや順番おかしいだろ。

俺ら初対面の設定？

だったらいきなり名前聞くの失礼すぎるだろ。

「…Nice to meet you too」

「は、はっおーるどうわーゆー」

「はっ？」

何語喋ってたんだ、お前はさっきから!!!

これ何が聞きてえのかわかんねえから!!!

「はっおーるどうわーゆー!!!」

いや変わってねえから。

そんな『ゆー』を強調されても…。

「…Pardon?」

「だーからっ!!!何歳ですかって聞いたの!」

「痛い痛い痛い…!」

蘭南は何度も聞き返す俺に怒ったのか教科書で俺を殴る。

俺のせい?…発音が悪くて聞き取れないのは俺のせいじゃないだろ  
っ…。

「んじゃ次いくねっ」

「…まだあるのか…」

## 五話目 + 英語 V S 蘭南 後編

「もーっ！！やだっ！！英語なんか大嫌い！！！」  
「痛っ…」

蘭南は自分の言う英語に進歩がない事に気づき、教科書を俺にぶつけるという何とも言えない八つ当たり行動にでている。

「教えてよっ！お兄ちゃんの馬鹿！！！」  
「俺のせいだよっ」

俺は何度も見本(?)として聞かせてやっただろ！？  
俺は頑張って教えたぞ！！！！  
お前が頑張って覚えるよ！！！！

…と言いつ返したいが、これ以上暴れられても困る。

「落ち着けー。俺の部屋がどんどん悲惨になっていく」  
「お兄ちゃんの部屋なんか知らないもんっ」  
「お前に気になられても困るけど…っこれ以上暴れんなって！！  
片付けが大変だから！！！」

蘭南は俺の言う事を無視したまま俺の本棚へと辿り着く。

…っつて、ん？

本棚？…これは…やばい、か？…やばいよな…あいつにとって天国

じゃねえか!!!

蘭南は案の定俺の漫画を手に取り、俺に向かって投げるふりを始める。

「ちょっと待て、蘭南! それ投げたら本気で怒るぞ!？」

「お兄ちゃんなんか怒っても怖くなんかないもん!！」

「怖さの問題じゃねーからっ! おい、まじでやめろっ」

蘭南が投げようとした瞬間???

ドンドンドン! ! ! ! ! ? ? ? ?

急に俺のドアにありえない程のノックが聞こえる。その音に蘭南は少し怯えながらもドアの方を見る。

「…何？」

『開けて』

「……却下」

『日本語分かるかな? 開けてって言うてんだけど』

「…分かった、分かった。入っていいよ」

俺が促すと勢いよく開くドア。

そんなドアに驚いている姉貴。

「…どした？」

「いや…鍵しまってるのかと思ってた」

「あっそ。で? 何の用？」

「蘭南、五月蠅い」

姉貴の視線は俺を通り越して蘭南に向けられる。

姉貴は今かなり機嫌が悪い様子。

このままだと蘭南は泣かされる…な、たぶん。

「お、お兄ちゃん…」

「…何だよ」

蘭南は怖じ気付いたのか、俺の服のすそをひっぱる。

おい。

俺に助けを求めないでくれー

っていうか、巻き込むな。

今の姉貴の視界に俺を入れるな。

「ちょっと蘭南おいで」

「……やだ」

「お・い・で……！！！」

…怖いッス…姉貴。

は、迫力が…。

母親曰く、俺が怒った方が怖いらしい。

…これより怖いのか？…俺。

ふと蘭南を見ると、目が滲みまくって…というか俺の服で涙拭くな

！！

あ、ほら。そこだけ色変わったじゃねーか…ってそこじゃなくて

…。

やべ。今俺一人で…。

「拓哉っ！！！」

「？……ん？」

「蘭南連れておいで」

「…俺はあんたの家来か」

「拓哉あ…??」

「はい」

…絶対姉貴の方が怖いよ。

「あ。姉貴」

「ん？」

「今日は許してやってくんね？俺が怒つとくから」

「…拓哉が怒ると怖いからなー。じゃあ、よろしく」

…姉貴も十分怖いですよ…。

俺は蘭南に目を向けると???

「…う…ひっく…」

「…泣いてんのかよ、」

かなり泣いているらしく肩が上がったり下がったり…。

蘭南も災難な日だな…英語に負けるわ、姉貴に怒られるわ…。

俺はそつと蘭南の頭を撫でる。

…といつもお礼の代わりに笑顔を向ける蘭なはさすがに笑えなかったからかお礼する気がなかったのか、横から抱きついてきた。

五話目 + 英語 v s 蘭南 後編 (後書き)

英語 v s 蘭南というより姉貴 v s 蘭南の方がいいか . . . ? W W  
最後よく分からない終わり方でスミマセン or z

## 六話目 + 冷空

「おい、姉貴！ー蘭南が呼んでるぞー！ー！ー」

只今、蘭南に頼まれて姉貴を呼び出しの最中。  
蘭南のダイエツトは…最近怠けている。  
つまり…今はダイエツトはしていない、という事だ。

…やっぱり続かなかったなー。

俺は予想的中だったということ。

そして、姉貴よ…早く出て来てくれー！ー！ー！  
暑いつー！死ぬー！ー！

「おい！ー早く来いよ！ー！ー」

ドンドンドン！ー！ー！ー！

『五月蠅えな！ー！ー！ー！』

「…お、怒んなよ…。じゃあ早く出てこい」

『今、忙しいー』

「ニートのくせに忙しくねえだろ」

『今PCを…』

「いつつもPCじゃねえか！ー！ー」

『それが私の唯一の幸せ…いや、仕事といっても過言ではないだろ  
』

「何が仕事だ！ー！遊んでるだけだろーが！ー！ー」

『失礼なこと言わないでー』

「今の間も俺は一言も失礼なことは言っていない」

『ニートって言ったじゃん』

「…いつの話だよ。それ会話の最初の方に言ったただけだろ」

『ほら言ったんじゃない』

…。

何かムカつく。

年下の相手してるみたいだ…あ、姉貴の精神年齢が俺より下なだけか。

「なー、暑いから早く出てこいよー」

『じゃあ入ってくればいいじゃん。ここクーラーがんだよ？』

俺はドアを開けた時にふわぁっと冷たい空気が好きなんだ。

…って今なんで俺の好きなこと言った？

まあ、いいか。

俺は姉貴のドアノブに手をかけ回すと…。

ガチャ…

ん？開かない、ぞ？

「姉貴ー、開かねんだけど」

『鍵閉めてるもん』

…。

はい？

鍵しめてるって言ったか？今。

何だ、俺を弄もてんだのか……！！！！

俺のあの好きなことを弄もてびやがったな！？

「…おい、ちょっと出てこいよ」

『嘘嘘、ごめん。鍵開けたから……！！！！』

俺は疑いながらもドアを開ける。

するとドアは開き、あのふわあつとした空気がひんやりと体にあたり気持ちいい。

「で、蘭南がなに？」

「ああ、呼んでるよ。PC使いたいだって」

「今は駄目って言っというて」

「分かった」

そこで会話は終わり、姉貴の部屋にはカチカチという音が響く。

俺は扇風機の前で涼む。

.....。

.....。

「いつまで居るんだよ!!早くでてけっ!!!!」  
「うわっ!!!!」

俺はなぜか部屋から追い出された。

七話目 + ドライヤー 前編 (前書き)

ご無沙汰ですorz

これからも引き続き三日坊主、よろしくお願い致しますm (

m

## 七話目+ドライヤー 前編

「あつちい〜〜〜」

姉貴が風呂から出て来た。

姉貴はソファを見つけると俺が座っているのにも関わらず猛突進してくる。

あ、いや…正確には倒れ込んできたって言ったほうがいいかな。

「うわっ！ー！」

「邪魔あつ」

俺は避ける。プライド？そんなものはない！！命が大事！！！！  
…まあ少しくらいはプライドあるけど…って俺何言ってるんだ…？

「お兄ちゃん、ドライヤー知らない？」

「知らねえよ、」

「私が使ってるよ〜」

ゴオオオオオオ………??

姉貴の声が聞こえたかと思うとすぐにあのドライヤー独特の五月蠅い音が聞こえて来る。

「あ、私も乾かしてえ〜」

蘭南はすぐに姉貴の所へ行った。姉貴は面倒くさそうにしながらも乾かしてやっている。

さすが姉妹…。

つてなに浸ってんだ、俺！！

年寄りじゃねえんだっ！！まだ現役だっ！！！！

……………。

なんか今凄い年寄りっぽいこと言ったよな？俺。  
もし年寄りだったら言ったあと腰痛めるよな…。

…ま、いつか。

「???い…ん…！お兄ちゃん…！！！」

「…あ、何だよ」

やば、全く気づかなかった。

蘭南は少しふてくされてる様子。

「お姉ちゃん…！やっちゃって…！！！」

「は…!？」

蘭南の合図とともにゆらりと立ち上がる姉貴…。

怖い、これは怖い…。

女つてのは気がコロコロ変わりやがるから扱いにくい。

「蘭南!!」

「任せてっ」

「え!?!おわっ!!ちよっ、やめろって!!」

蘭南は俺を羽交い締めにする。

俺は次々と起こる事態についていけず一人で混乱していた。

すると、なぜか姉貴は冷蔵庫へと向かった。

もちろん手にはドライヤーを持ち…。

## 八話目＋ドライヤー 後編

「ちょっと待ってねー、蘭南。喉かわいた」

…何だそれ。

「え〜っ!!!!早く〜!!!!」

「五月蠅い!!!!」

「は、はいっ」

……何なんだよ、こいつら。

仲間だと思っただら容赦なく殺されていくような関係か!? コイツらは。

しかしまあ、姉貴も急に怒りだすからなあ。

姉貴に怒鳴られて蘭南は機嫌を悪くしたのか俺の頭を軽くポンポン叩いてくる。

え、なんで?

なぜ俺の頭を叩くのだ、蘭南よ。

しかも次第にストレスが溜まってたのか力を強くしていく。

「痛えよ…」

「痛くない」

…いや、誰もお前の感想は聞いてねえよ。

そりゃお前は痛くないだろうよ、叩いてる方だもんな。

「さて、と。やるか蘭南」

「うん」

満足したのか、姉貴は冷蔵庫のドアをバタツと閉めるとドライヤーを片手に近付いてくる。

「……………」

無言で俺の目の前に来て、座っている俺に視線を合わすようにじやがむ姉貴。

そして浮かべるは満面のニヤケ顔。

怖えええええつ!!!

めちゃくちゃにやけてるよおお!!!!

「ではいきますよー」

「は、何す???」

ゴオオオオオ…???

再びあの独特な音が耳に入る。

…五月蠅え…。

が、今度は熱い風…つまりは熱風が俺の顔面を直撃。

「熱い熱い、熱い!!」

「大袈裟だなあ、お前はあ」

「いやいやいや!!まじで熱いんだって!!お前もやってみろよ!!」

俺が促すと姉貴はかなり自分の顔面と離れた所から熱風をあてる。そして一言。

「温いじゃん」

阿呆か――！！！！！！！！

当たり前だろーが！！自分とドライヤーの距離をちゃんと見てみる！！

明らかに離れ過ぎだよ、熱風こねえよ！！

「あはは、お兄ちゃん大袈裟」

「は！？」

俺を羽交い締めに行っている蘭南は呑気に笑う。

それを見てなんかムカついた俺は普通に羽交い締めに解いて蘭南を羽交い締めにする。

え？何で簡単に解けたかって？

いやあ、小学生の女の力は弱いものでしてね。

「ちよ、姉貴。コイツにもさっきと同じことやってちやって」  
「押忍」

ゴオオオオオ……???

「熱っ！！……あーっーいいいい！！！！」

「え、ちよつと！！姉貴やめろ、やめろ」

姉貴も少し焦った様子でドライヤーを切る。

なぜかというと、あまりに熱かったのか蘭南が泣き出してしまったから。

予想外の事態に俺も姉貴も啞然。

「ひつく…お兄ちゃんの馬鹿あゝ、ひつく…」

「え、俺かよ！」

なぜか俺のせいにされていると分かった姉貴は一気に立ち位置を変え、

「あんたがさつきちゃんとしたリアクション取らないからー」

「待て待て!!」

「なに？言い訳？」

姉貴は完璧罪から逃れようと必死に俺になすりつけてくる。

…もとはと言えばお前らがあんなことしなけりゃ平和に寝れたのに。

俺は思った。口に出してはいないけど。

八話目＋ドライヤー 後編（後書き）

ドライヤーは皆さん気をつけて下さいねーノ  
ほんと、ヤケドしますからw

## 九話目+こたつ

はー…段々と寒くなってきましたねえ…。  
寝起きです…リビングのこたつ目指して階段おりてます。

「おはよ、お兄ちゃん！」

「おう」

俺がリビングへ入ると、蘭南と姉貴…母さんがこたつで温々していた。  
た。

…え、何この状況。  
まさかの女子トーク繰り広げてた!?

なんて思いながらも空いているスペースへと入りこたつに入る

…と、まず誰かの足にぶつかる。

俺は気にせず一旦足を引っ込め、さっきとは違う方向へと足を伸ばす。

…が、また誰かの足にぶつかった。

「……………」

俺は一度三人を見渡すも三人とも何やら楽しそうに会話をしている。  
はあ、とため息をつくともう一度また違う方向へと足をのばす。

…が、やはりぶつかる。



「いいよー……あ、やっぱやだ」

何でああああ！！

お前のすぐ後ろにあるんだぞ！ちよつとこたつを出れば届く距離だぞ！

しかもお前、距離を確認してから断つただろ、このやろつ……ふざけやがって……！

別にお前が取りにいってる間に場所取ろうなんて思ってなかったよ！変な想像つけてんじゃないやねえ！

……その後俺は何度か戦ったが、結局自分の部屋へと戻ることになった……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7961m/>

---

三日坊主

2011年10月7日06時46分発行